
確かにある必然

吉良 結衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

確かにある必然

【Nコード】

N4153T

【作者名】

吉良 結衣

【あらすじ】

ただ、面白くてエロくて笑えるそんな作品です。

朝、起きると隣に見知らぬ人がっ？！

よく見ると…

昨日(1/3)

朝。

「…ん…?」

起きると、見知らぬオンナが躰いびきかいて寝てる。

「おい…」

ムカつく程、爆睡…

「もしもおーし…」

起きる。と言わんばかりに、鼻をつまむ。

「ん…っ!」

ハアハアと息を切らせて、

「ん?」

コツチを見て、

「あんだ、誰?」

それは、こちらの台詞です。

「あっ!」

今、全裸である事実に気付くカノジヨは、

「嘘…」

と、咳せきいて

「嘘、よねえ?」

俺にも正直わかりません、よお?

「…だったのに…」

聞き取りにくかったけど、

『初めて』

そう聞こえた。

「どうしてくれるのよっ」

と、言いながら俺の両肩を掴んで…乳、揺れてますよ?

「ねえ!」

ますます激しく揺れる乳が、いや、俺の理性がどうにかなる前に

「していないっ」

かどうかはわからないけど、

「…本当?」

大きく頷うなづいて、カノジヨの顔を見る。

昨日(2/3)

「那珂^{なか}？」

知らないオンナ、じゃなくて

「ん？」

昔、近所に住んでた幼なじみで同級生の那珂だった。

名前は、確か…

「倫子^{りんこ}？」

無愛想で、グラマーさん。

「ん？」

視力が悪いのも、昔から変わらない。

「誰？」

『眼鏡…ドコだあ…』

と、言いながら眼鏡がないので、手ブラで、寝てる俺の上にダイブ！

「俺だよ…？」

チュー出来るくらいの距離で

「お前か…」

目の前で思いつきり舌打ちして、

「帰れ」

待て。

「那珂こそ帰れっ」

ココは、俺の住まい。

「ん？」

あ、コイツ相当の方向音痴なのを今、思い出した。

「那珂？」

完全にフリーズしたならば

「倫子さぁーん？」

揉ませてもらおうかと下心が。

「外海そとめ」

もう掴んだけどお…

「眼鏡、探せ」

掴んだ両手の上から那珂の両手が覆い被さる。

「眼鏡、は？」

殺気のある目に手が弛ゆるみ、

「早く探せっ」

気付けば、床に投げ飛ばされてた。

昨日(3/3)

「痛あ…」

ん？

「那珂、」

「踏んだだろ？」

言う前に、言われてしまった。

「服、取って」

若干、ムカついてきたこの気持ちを脱ぎ捨ててある那珂の服に…
許す！

「これえ？」

と、投げ渡した服をキャッチして

「サンキュ！」

上から被り、ワンピースのメイド服で、

「見せパン、ない？」

ベージュのパンツを履き、

「外海？」

白のハイソックス履きながら、

「見せパン」

早くしろって、片手催促。

「はいはい…」

下に転がってる白のふわふわパンツを、思いっきり投げつけよう
としたら、

「遅い」

すでに、那珂は俺の目の前にいて、

「い、い、痛いって！」

手首を捻^{ひね}るなっ

「ありがとう…」

落ちた白パンを履き、

「那珂」

壊れた眼鏡をかけて

「帰れる？」

頷いたまま、下向きのまま

「コレ」

足の指で取ったのは、

「昨日の？」

未開封の箱のコンドームの袋が、

「ち、違う……」

袋だけで……

「んじゃ、バイバイ」

嘘たる……

今日

昨日の出来事を学生時代からの無二の親友、おおかわち大河内 なお尚にメールで尋ねる。

尚：覚えてなかったのか？

俺：ああ。全く。

尚：マジで？

俺：うん。

尚：メイドカフェ行ったよな？

俺：うん。

尚：その後、飲み会があったのは？

俺：それも覚えてる。

尚：メイド服着たコが、殴り込みに来たのは？

俺：覚えてない。

尚：お前の後頭部、叩いてお持ち帰りしたぞお？

俺：マジで？

尚：うん。

俺：そりゃ記憶ないわ。

尚：頭、お大事に。

副業での再会

俺の職業は、フリーライター。

表向きは…アーティストの取材や記事、書いてます。

実態は、本業になりつつある副業に、生活の糧が。

AVルポ&レビュー。

まあ、一石二鳥的なトコロで落ち着いてる。

今日は、メイドカフェで『撮影があるので来ないと減給ねえ』と、脅されて来たのは、いつか来たメイドカフェ。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

万遍の笑みで、丁寧に御辞儀する。

『チッ』

舌打ち？

「生憎ですが、今日は貸切になっております…」
関係者です。と、言わんばかりに会社の名刺を出す。

「ありがとうございますっ」

カノジヨも名刺を。

「な、那珂…那珂?!」

いつか見た見た那珂とは別人、だった。

「今日は…」

眼鏡じゃない。

「悪い?」

ノーメイクじゃない。

「悪くない…」

正直、「綺麗」と言いたい。

「外海、」

俺の腕をプニプニして、

「帰れ…」

そう言いながら、俯うつむいてまだ、プニプニしてるので、その手を掴

む。

「嫌なの？」

嫌じゃないもん。と、顔を少し上げる那珂の目が若干、潤んでる。

今日に限って(1/2)

ビキニにエプロン姿の彼女は、千倉^{ちくら}真子^{まこ}。3年くらい付き合っているが、フリル付きのエプロンは見るのが初めてで、ビキニ姿は試着すら見た事がない。

「おかえりい」

いつものようにハグして、

「……チューは？」

この笑顔は、前にも見た事がある。

「喋ってたら出来ないだろ？」

怒ってる事だけは、確か。

「そうだね……」

と、目の前に見覚えのある白い物体が。

「何、コレ？」

彼女は、白いカチューシャを

「私の、じゃないよ？」

振り回して

「どうしたのかなあ？」

近付いて

「俺の。ほら、前髪邪魔だし……」

笑顔のまま、ビンタされたのは言うまでもない。

今日に限って(2/2)

「ただいまあ…」

その修羅場に乱入するカノジヨは、

「那珂っ」

驚きのあまり、絶句。

「那珂？」

「すみません…」

帰ろうとする那珂を

「どういう事かなあ、權くん？」

引き止めて、俺の前に突き出すマ」。

「カイくん？」

那珂は、首を傾げる。

「源氏名です」

本名は言わないでくれ。

「權くん、」

ウルウルさせる瞳に

「ドコ触ってるのかなあ？」

思わず、手がっ、両手がっ！

那珂を触りたいって！抱きしめたいって！言ったんだもん。

「權？」

ビキニにエプロン姿のマ」に。

「外海っ?!」

セーラー服の那珂…

「ごめん…」

俺、どっちも好き。

「本当にごめんなさいっ」

でも、土下座で許してください。

うらはら(1/2)

「オハヨウゴザイマス…」

昨日の修羅場は若干、筋肉痛を伴う。

「おはよう…」

相変わらず、編集長は競馬雑誌を見ながら挨拶してくれたので気付かれてない。

「おはようさん」

編集集中の関澤せきさわさんもデスクトップをガン見で、気付かず。

「外海、どうしたあ？」

後ろから頬のドデカイ絆創膏を触るのは、

「サエさん、やめてください」

性別が中途半端で、オナナに興味のない同僚。

「やめなあ〜いつ」

マジで、嫌なんだってっ

「サエ、超キモい…」

ソファアから覚醒した尚が、アクビをしながら

『おはよう、外海』

と言つて、また寝る。

「キモいって、」

その尚にまたが跨り、

「どどういうことかなあ?」

目が笑ってないサエさん。

うらはら(2/2)

「サエ、編集しろ」

無修正のデータが詰め込まれたメモリーカードを、サエさんに投げつける。

「仕事する気がないから、帰れ」

ナイスキャッチして、そのまま自分のデスクに移動するサエさん。

「あるわよお」

パソコンの電源を入れて、

「編集長こそ、仕事する気あるのかなあ？」

ん？と、首を傾^{かた}げる編集長は

「あるよお？」

見てた雑誌を、サエさんに目掛けて投げる。

「あ……」

避けて、尚に直撃。

「痛っ！」

リアクション芸人並みに痛がる尚から、雑誌を拝借。

「失礼……」

確かに、読んでた雑誌の記事には、編集長の名前が書いてある。

悪夢？再び

朝。

起きると、隣には

「食べれない……」

幸せな夢を見る

「もつと……」

那珂が寝てて……

「えっ?!」

那珂っ!

「……して……」

抱きつくなあって!

「ギュッて……」

那珂、泣いてる?

「外海……」

いかん。

「お願い……」

俺、そんなに理性強くないから。

「ゴメン……」

抱きしめるくらいなら、許される?

「もつと……」

那珂の胸が潰れる感覚を、肌で感じながら

「外海……」

気付けば、キスをガッツリして

「……もつと……したい?」

頷く那珂の合図で、もう引き返せない一線を越える。

そんな最中、

「誰か…来た、よお？」

呼び出し音を連打するのは、

『開けなさいっ』

間違いなくマコで、確定。

「やめ…」

やめたくない。

「イヤ…」

必死に抵抗すると、もっと見たくなる那珂の可愛い顔に

「外海っ…」

何か聞かなくてもわかるから、キスで。

『那珂、好きだよ』

舌を絡めて

『本当に好きだから…』

指、絡めて握り締めて、

『離したくない』

握り返してくれた合図で、続きを。

悪夢？再び（2）

難なく、朝からやってしまい…

「はあ…」

このダルさ。

「權ちゃん、ダメッ」

全力で一発やった報いが、文章に出たらしい。

「ふあい…」

俺的には、エロ過ぎてどうしましょう？

「リアルは程よく、妄想は？」

「無限大」

エロく書くにあたって、編集長のこだわり。

『リアルは程よく、妄想は無限大』

これに該当しなければ、ボツ。

「もっと欲望、出さないと読みたくないよぉ？」

『權ちゃん。』

そう言いながら、メモ帳に

『ボクと寝たいのぉ？』

と書き、俺に渡す。

『興味ないです。』

と書き、編集長に渡す。

「やり直し」

無愛想に、原稿を突き返される。

「はあい…」

これで、もう6回目。

「編集長お？」

『寝ます』って言えば、この仕事終わりますかぁ？

「なぁにい？」

仕事に関しては、尊敬できるから、そんな事言えません。

「權ちゃん……」

編集長……俺は、まだ越えたくないです。

悪夢？再び（3）

ん？

滅多に鳴らない俺の携帯電話の着信音が、響く。

尚

定時に帰った尚から、合コンの誘いは毎度の事なので、

「断る」

残業と言ったのが、聞こえてなかったのか：あの合コン魔。

『外海。メイドちゃんいるよお？』

あと、俺はメイド服が特別好きではない。

「今日は行けない」

それに、今日はマコが来る日だから、無理。

『外海をお持ち帰りしたメイドちゃん、だぞお？』

俺を？

『もしもおーし？』

あ。

「尚。今日はパスッ！」

とりあえず、仕事終わらせてから考えよう。と思っただが、頭の片隅に那珂のメイド姿が、チラチラ過ぎる。って、那珂とのインタビュ記事で、ダメ出し。

「はあ……」

俺、浮気したから今、こんな仕打ちを受けてるんでしょうか？

「ふう……」

俺、那珂の事、好き過ぎて書けないんでしょうか？

悪夢？再び（4）

日付は変わり、ぼんやり明るくなるまで、仕事を。

「權ちゃん、合格！」

激しくハグをされ、押し倒された。

「編集長、ありがとうございます！」

最後まで一緒に残ってくれた事は、感謝いたします。

「よくできましたあ〜」

但し、チューは要りませんっ

「やめてくださいっ」

顔の形が変わるくらい抵抗してるのに、

『權ちゃん、チューしよあ？』

編集長の顔はグングン近付き、

「ねえ？」

いつの間にか、編集長のドアップがあった。

「さて、帰ろうあ〜」

唇の感触もあった。

悪夢？再び（5）

「はぁ…はぁ…」

日頃の運動不足を後悔しつつ

「遅いつ」

これでも、全速力で帰って…

『…おかえり…』

玄関先で、裸にエプロンのマコにハグハグされ、

「ただいまぁ」

マコの胸に顔を埋めて、腰に手を回し

「…よいしょっとぉ…」

お暇様抱っこで

「權くん…」

ベッドに向かう途中、

「私達…もう…」

『ダメ…？』

泣きそうなマコの目元に、軽くキスして、唇を重く重ねて

「ゴメン…」

最期に、できない…

「權？」

上目遣いで、見つめられても

「本当に…ゴメン…」

無理。

「謝らないで…」

少し前まで、いとおしくて堪らなかつたマコに、那珂を思い描く。

「權…」

キスして、

「好きだよぉ…」

キツく抱き締める。

悪夢？再び（6）

「俺も…」

嘘でもイイのか？

「好き…？」

俺、那珂のメイド姿しか見えてない…

「好きだよお…」

鏡越しに映る那珂の姿しか、俺には見えないから。

「あ、」

また間違えて

「すみません…」

後退りして、帰ろうとするメイド姿の那珂を呼び止める。

「待て」

『行かないで…』

絡まるマコの足が、より一層締まり、動けない…

「マコ…？」

『触って…』

エプロンから溢れる胸に、俺の手を押し当てる。

「触るだけ？」

『いぢわる…』

マコのイジメテクダサイ目線に

「『揉んでください』って言わないと、揉まないよお？」

俺のドSスイッチ押しなよ…

衰える躰

2日続けて、朝から全力疾走。

「權ちゃん、アウトツ」

編集長に『私が幹事です』のタスキを掛けられ、

「来月の幹事、決定！」

いきなり、隣でバズーカ砲風のクラッカーが鳴る。

「ぬあっ?!」

驚き、隣を見れば。

「おめでとう！」

尚から勢いよくハグされ、近くにあるデスクに寄り掛かる。

『店は任せなさい』

そう囁くと、微笑む尚に、

「今日は、雪降るかもお？」

プライベートテンションを見せない仕事場での行動で、編集長はじめ社員一同（サエさん、関澤さん）尚に対する視線がスゴく激しい。

「記録的な大雪かもお？」

サエさんに至っては、同族を見る温かい笑顔で、尚の両手を握る。

「いや、猛暑だろ？」

尚は、サエさんの手をすぐ振り払い、近くに置いてあるプッシュシャワー型アルコール消毒液を手に振り掛ける。

「加齢臭、退散！」

と言いながら、手揉みする尚に、

「尚、俺とはタメだよなあ？」

サエさん、目が笑ってません。

偶然

「はあ……」

今日は、ランチのハズレ加減に昼からの仕事のモチベーションは、急降下必至。

「昼から……テンション、萎ええ……」

一緒にランチを共にした尚は、即効でテンションダウンして、ダラダラ帰途に着く最中、

「あ、」

交通量の多い大きな道路を挟んだ向かいの店から、サエさんと彼女らしき人物が口論しながら出て来た。

「サエのオンナ？」

尚は、携帯を取り出し、フォトモードにして、ズームインすると彼女(?)は、

「な……」

「あれ？メイドちゃん？」

那珂がサエさんに、平手打ちをハデにブチかます。

「外海、早く帰るお」

興味ナイ尚はそう言い残し、先を急ぐ。

『サエさん、ファイティング！』

右手を軽く握り、サエさんに念を贈る。

偶然(2)

「ん？」

目が合って、

「なあにい？」

近寄るサエさんの顔が…

唇がっ

『隙有りい』

俺の唇を。

『サツ、サエさんっ』

しっかり奪われた。

「俺の權に…」

編集長、いつの間に？

「サエ、避けるお〜」

応援する気、全くナシの尙が指差すのは、

「志布志…」

両指、パキパキ鳴らして

「俺の…って言うたなあ？」

編集長を

「浮気しとる場合ちやうやろっ」

お姫様抱っこして

「これ、お借りします！-」

編集長を皆に見せる。

「はい…」

返品不可でお願いします。

偶然(3)

関澤さんのデスクいっぱいに置かれたダンボール箱：

「葛尾^{かつらお}、来てたのか…」

葛尾さん愛用のブーツ（靴？）を手渡される。

「外海、ダツシユ」

関澤さん、編集長のプライベートに入りたくないです。

「褒美にコレやるから」

つて、それは俺の副業…

仕方なく葛尾さんの忘れ物を届ける道中、

「外海…？」

街頭で、チラシ配りするセクシーなチャイナ服のお姉さんが

「はい…？」

俺を知っている？

「外海、あのオッサンどうにかして…！」

声で那珂だと分かり、

「なっ、那珂…！」

仕事は？と聞く前に

「仕事にならないから、ビラ配りしてたのっ」

那珂の怒りは当然、チラシから俺？

「外海、」

腰に腕回されて

「ちよつと手伝ってえ？」

営業スマイル全開の那珂のドアップに

「う…」

「ごめんなさい。」

「ごお？」

眉間にシワ寄せて

「手伝ってくれるよねえ？」

右腕を腰から首に移動させ、顔を俺の肩に置き、

「お願い…します…」

囁く那珂は

「ねえ？」

卑怯だ…。

無償の愛

那珂の事、好きだからって俺、そこまでお人好しじゃない。

『外海の上司が、営業妨害してるの』

と、耳元で吐息まじりに誘われたから来たんじゃないっ

「お帰りなさいませえ」

可愛いメイドさんに

「ご主人様あ」

紛れて

「……………ん？」

可愛いオツサンメイドが

「權ちやあゝんっ」

駆け寄るので

「那珂、ごめんっ」

「え？」

思わず隣にいた那珂を盾にして、難を逃れた。

「う……………」

編集長が真っ直ぐ飛び込んだのは、

「もつとお？」

柔らかな那珂の胸に、もつと挟まれて…

『助けるお』

タップしながら

『上司命令だあっ』

ジタバタして、ますます顔を擦り寄せてるような気が、しないで
もない。

「ド変態」

案の定、編集長は地面に急降下。

無償の愛（2）

「痛い…」

地面に、顔を擦り付けて

「痛いよぉ」

大人げなく泣き叫ぶ編集長の傍へ行く前に、

「志布志、大丈夫か？」

葛尾さんが薔薇の花束を抱えて、花束ごと編集長を持ち上げる。

「葛尾、遅いつ」

ジタバタして、今にも落ちそうな編集長を

「深い紅色が大量になくてなあ」

難なく抱きかかえて、

「おめでとう」

葛尾さんは、今まで見たことないくらいの優しい笑みを浮かべる。

「おめでとう？」

何が？くらいの勢いで、首を傾げる編集長に、チューをする葛尾

さん。

「うわぁ…」

隣で、口を抑えて

『リアル…萎え…』

眉間に、深いシワを寄せて

「あり得ない…」

俺の顔見て、

「那珂？」

編集長と葛尾さんの事で、気分が悪いワケじゃないんだろ？

「平気…」

倒れる那珂の身体を、引き寄せた。

ワスレモノ

那珂に持病があると思いついたのは、倒れたあの一瞬。

「…大丈夫だって…」

那珂の事が思い出せなかったのも、入退院を繰り返してて、あまり見かけなかったから。

「…いつもの事だから…」

何で、今まで思い出せなかったんだろう。

「外海？」

サエさんに、頭をポンポンと叩かれるまで、泣いてる事に気付かなかった。

「だから、」

俺の目をタオルハンカチで、覆い隠す。

「そんな顔、倫子に見せないでねえ？」

そして、思いつきり、力の限り俺の肩を叩くサエさん。

「邪魔者は、帰れっ」

待合室の廊下で、危うく転げそうになる。

「痛いじゃないですかあっ」

サエさんは笑顔で、

「後は任せなさいっ」

動じないサエさんが、大人に見えた。

ワスレモノ(2)

「尚、何で言ってくれなかったんだよっ」

八つ当たりなのは、分かっている。

「だからあー、メール送っただろ？」

早送りで、AV見て、感想文を書く。まだまだ先が見えないが、これを2日以内でやれと、インチキ関西弁のオッサンがダンボール箱の奥底に、ラブレターを仕込んであり、尚が手伝ってくれなかったら…

「むしろ、命の恩人に感謝すべきじゃない？」

て、言いながらコスプレ衣装に着替える尚に、

「待て」

「マコさん、いないでしょ？」

だからって、尚がやらなくてもいいんじゃない？

「サエがよかったあ？」

百歩譲って

「尚で、」

「で？」

セクシーなナース服を脱ごうとする尚を

「尚『が』いいっ」

抱き締めて

「萎えたあ」

「今日だけ頼みますっ」

思いつきり、ベッドに投げ込んだ。

ワスレモノ(3)

仕事だから、と言いつ聞かせる。

「外海？」

目の前にいるのは、愛して止まない那珂だと、言いつ聞かせる。

「本番はしないから……」

尚は頷き、

「当たり前だっ」

笑顔で俺の股間を蹴り、

「外海、ボクはまだ、ノーマルでいたいのっ」

痛くて、どうでもよく……

「やるなら攻めたいよねえ」

ならん！

「やっぱり、サエさん呼ぼうかなあ……」

ふと顔を上げたら

「……マコ……？」

元カノが、デッカイ白い袋を背負いながら、部屋を物色している。

「マコさんっ?!」

尚の大声にビックリして、テーブルの上に置いてある化粧品を、

床に落とす。

「……ゴメン……」

落としたモノを袋の中に入れて、

「もう帰るから……」

目を合わせてくれないマコに

「マコ、」

駆け寄り、

「……今まで、ありがとう……」

これ、あげる。と、マコのお気に入りのコンドームがいっぱい詰まった、マコのお気に入りのキャラクターが描かれた手のひらサイ

ズ
の
箱
を、
渡
す。

御褒美

「終わったあゝ」

二夜連続、徹夜で頑張った甲斐があり、

「やれば出来るモンだなあ……」

子供がかくれんぼするのに、最適な大きさのダンボールを

「終わったあ……」

大人が二人、顔を突っ込んで余韻に浸る。

「頑張ったねえ……」

聞き覚えのある声。

「うん……」

耳元で囁き、

「よく頑張りましたあ」

ギョツと抱きしめるのが那珂なワケ……

「なっ、なっ、」

那珂がいるっ!?

「外海？」

首を傾げながら、那珂の顔を触る。

「那珂だよなあ？」

「うん……」

そして、

「外海、」

確認するために、見馴れたメイド服から溢れ落ちそつな谷間に、
手を挟もうとしちゃ駄目？

「ホンモノだから」

思いつきり、腕を掴まれて、

「……ケチい……」

ヒネリを加え始める。

「痛いっ」

悶絶する俺を

「プレイの邪魔しちゃ悪いから帰るねえ」
置いてくくなよぉー!!!

「ん？」

だから、

「そういう趣味ないって」
帰ろうとするな、我が友よ。

「メイドちゃん、」
笑顔で、

「骨折れるってさあ」

那珂の腕を掴み、手を退ける。

「もやし野郎だからさあ」

口は悪いが、イヤツだと思いたい。

マボロシ

「外海？」

「尚が居なくなつた途端に

「那珂……」

ムラムラと

「嫌。」

ムラムラがっ

「嫌っ」

止まらんっ

「外海、触るな」

もう触りましたよ？

「無理」

え？

「嫌っ」

掴んだ手を離さないからって

「ごめん……」

謝るなら、最初から壁に穴開ける程、本気で投げ飛ばすなよ……。

「痛かつたあ？」

寝転ぶ俺に近付き、

「痛いよねえ……」

思いつきり、

「痛かつたよねえ……」

脇腹の皮、踏んつけてますよお？

「ごめんなさい……」

座り込みながら、壁に謝る那珂の耳元で

「痛い……」

生身の俺、存在感ナシ？

「外海も……」

も？

「ごめんなさい……」

俺の体は、壁以下？

「ごめんなさい……」

顔の上に乗っかる那珂の乳に免じて、許そう。

「外海、」

でも、

「大好き……」

俺も好きだから。

「外海？」

ギブ。ギブ。

『苦しい……』

時として凶器になる、那珂の大きな胸。

「ごめん……」

グラマーだと自覚してない那珂の天然っぷりに、理性をなくしそ
う……

嘘も方便

リビングで寝転がって、携帯電話の着信履歴を見る。

全部、サエさん。

「サエさん？」

仕方なく、あまり聞きたくない声を聞こう…

「倫子は？」

第一声が、元カノの名前って…

「いないですけど？」

第二声は、舌打ち？

「使えねえなあ」

すぐ切れた携帯を、見つめる。

「…ん」

居るんだけど。

「…眠い…い」

サエさんに嘘つく程、大好きだから。

「倫子…」

チューしたら

「…ん」

次は…

「…いやあっ…」

そう言われると

「イヤじゃないでしょ？」

もっと揉みたくなるでしょ？

「ダメだってっ」

脇腹、弱いんだなあ…

嘘から出た何とか

「へ？」

んしゅうちょう？

「權ちゃん、ダメえ」

しまった。

「す、すみませんっ！？」

那珂のつもりで、下半身を…

「いやあんっ」

俺と一緒にモノがある。

「か、權ちゃんっ」

顔も確かに、編集長…那珂じゃない。

「恥ずかしいよおっ」

全然、恥ずかしくないだろ。

「編集長、」

邪魔です。と、言いながら、ベッドから放り出す。

「ひどお〜いつ」

声だけが聞こえる。

「今度、創刊するコスプレ雑誌に美雪ちゃんの特集をするんだけど

さあ…」

どうやらDVDの再生ボタンを押したらしく、アダルトな映像が映し出される。

「俺は、權が適任だと思ってる」

音量を上げて、ムクツと起き上がり、背を向けながら

「美雪ちゃんの事、黙っててあげるから…」

急に振り向き、

「エッチしょ？」

は？

「權くんっ」

俺、編集長に興味ないですからっ

嘘から出た何とか(2)

「志布志編集長、」
編集長の体を持ち上げる秘書の碓井さん。

「ちゃんと本題、言ってますんよね？」

相変わらず、絵になるくらい的美形で、男の俺でも碓井さんとなら…:…と思ってしまう魅力がある。

「言うから、言うからあゝ降ろしてえゝ」

ジタバタする編集長に、

『言うまで降ろしません』

そう頷き、編集長の耳を嘗めて、俺の顔を見つめる碓井さん。

「3人でませんか？」

碓井さんとなら…:…いいかも。

「いいねえゝ」

やっぱり、前言撤回。

『じゃあ、ちゃんと本題、言いましょうね？』

ずっと、俺の顔見てるけど…:…俺、鼻毛出てる？

「はあゝいい」

元気よく返事する編集長は、碓井さんから降りて、俺がいるベッドにダイビングする。

「うっ…」

案の定、俺の上に乗っかり、

「權ちゃん、3人でエッチしよ？」

それが、本題？

「違う、でしょう？」

貪欲な編集長に、笑顔でキレた碓井さんは、

「ああゝんっ」

鞭で、編集長の尻を軽く叩く。叩く。

「次、間違えたら…」

壁、試し打ち。

「……………わかった？」

「イイ音が、悲鳴が、部屋中に響き渡る。」

「ここ、こ、怖いよお」

ブルブル震えながら、

「權ちゃん」

チューする勢いで向かってきた顔に、強制・回れ右。

上司命令

尚：公私混同やあゝん（爆）

倫子は、その世界で有名になつたらしく、オファーが絶えない。
だが、

表情は『無』なので、權ちゃんが何とかしてねえ〜（編集長曰く^{いわ}）

俺：日頃の行いが良過ぎるからあ（照）

出来なきゃ…鞭が…

でも！でも！！

俺、そういうのも、大好きですっ

尚：碓井さんが手を出さなかったのは、キセキ〜

しかし、本題に入るまで編集長のセクハラ（編集長曰く、スキンシップ）は止まらず、碓井さんの許容範囲（俺に近付く）を超える
と鞭が飛ぶので、貞操は守られた。

俺：碓井さんは普通だつて…（汗）

でも、碓井さんの俺を見る目は、今思つと…

尚：碓井さんは男しか愛さない人だぞ？

カミングアウトだったのかも知れない。

俺：日頃の行いが素晴らしく良いからあ（照）

俺の記憶から、碓井さんのノーマルさは無くなる。

尚：外海がタイプらしいよお？

そんな情報、いらん。

上司命令(2)

いつもの意味不明な寝言を聞かなくなつて…

「……ん？」

よく眠れて、

「はあぁっ?!」

遅刻するくらいの安眠で

「外海、」

聞き慣れた声が

「痛い…」

踏んだ白いシートに絡まつてる物体から聞こえた気がする。

「那珂？」

足で柔らかいトコロを、突つ…

「痛っ！」

那珂、彼氏に護身術を？

「ご、ごめんなさい…」

故意的じゃないから、許す！

「外海？」

シートから出られなくなった那珂を、

「ダメ…」

ちよつとお触りしつっ

「ダメなの？」

もつとお触りしつっ

「いやぁ…」

可愛い声を

「嫌なの？」

もつと聞きたくて

「助けて…」

シートを破る。

上司命令(3)

「…あ…」

ありがとうの言葉をチューで、深く聞く。

「外海…」

潤ませる瞳にムラムラする気持ちをグッと堪えて、

「那珂…」

否、堪えきれないっ

「倫子…」

今は、無職になる以上のダメージより

「好き」

大切な人を失いたくない。

「イヤッ」

俺から視線だと結構、表情豊か。

「もっとしなくていいのかなあ？」

潤ませて、恥ずかしがって…

「ダメだっつてっ!!」

大爆笑する那珂をいとおしくて、ついつい首筋にチューしたくな
った。

「ひああ」

那珂の弱点がまた増えて、幸せを噛みしめる。

死活問題

「權ちゃん？」

「すみません。」

「…出直します…」

朝からイチャイチャしたからとは…

「美雪ちゃんと朝から激しい運動かなあ？」

「最近、文章に幸せが滲み出てるらしい。」

「權、」

原稿用紙を見ながら、

「葛尾の会社に戻っていいよあ？」

「目が笑ってない…」

「志布志、八つ当たりは俺だけにしておけ」

書類の山から関澤さんの声が聞こえた。

「してないもんっ」

編集長、相当乱れてますねえ。

「別れたんだってさあ」

大量の無修正データの山を、黙々と片付けるサエさん。

「奥さんとお」

俺に手渡したのは

「倫子、」

病院の名前と病室が書かれたメモ用紙だった。

「元気だから来るなあってさあ」

微笑みながら、少し涙を浮かべるサエさん。

「外海、」

「ありがとう」

那珂から聞きたかった。

場所も。

今の心境も。

嫉妬？

そうかも知れない。

死活問題(2)

何て、声かけよう…

「外海、」

『元気？』って、色んな意味で「無沙汰でもないのに、言えない。言えない。」

「お待たせ」

ん？

薔薇（ピンク）の花束？

「尚、」

「ピンク色の薔薇、だよ？」

それは、見て分かる。

「花言葉は…」

尚、カムバックとうーみい。

目の前で、どうにも止まらない笑いを、肩で表現するサエさん。

俺の部屋（社長室）に、引きこもりの編集長。

仕事を黙々とする関澤さん。

尚、花屋で働けばいいのに。

「……尚、飽きたあ」

散々、笑って、笑い飽きたって…

「サエに話してないから」

相変わらず、犬猿の仲。

「外海も、飽きたって言ってるよお？」

い、言っていないっ

「書きたくないよおっ!!」

編集長の声、だった。

「志布志、キレたなあ…」

舌打ちしながら社長室に歩いていく関澤さんが、

「サエ、例のモノ用意しろ」

例のモノ？

「はあい」

サエさんの手には、鞭、手錠、ロウソクのSM三点セットが。

「お仕置きするだけ」

俺の肩を叩き、これ以上ない程の笑顔を見せる真性なS様・尚。

死活問題(3)

「志布志？」

思いつきり、叩き壊すような気迫でノックする関澤さん。

「開けちゃダメッ」

編集長、思春期？

「話せばわかる嫁さんだろ？」

関澤さん、ベテラン刑事に見えてきた。

「…って……だって…」

号泣しながら

「葛尾、好きだもんっ」

カミングアウト？

「関ちゃん…」

社長室が開く。

「しいちゃんはもっと好きっ」

関澤さんに勢いよく飛びついて

「志布志、嫁さんの前で言え」

引きこもり、終了。

「恥ずかしくて言えないよお」

赤面して、関澤さんの胸板に顔を埋める編集長。

「志布志、重い…」

勢い余って、関澤さんの上に乗っかってるのも、御構いナシ？

S様、降臨

でも、編集長…そのラブラブ具合を苛立つヒトに、気付いて下さい。

『サエ、寄越しなさい』

サエさんが持っていたSM三点セットが、持ち主に渡される。

鞭を、床で数回試し打ち。

「大和、ハグする相手間違っやまとてない？」

パンツスーツ姿のカッコいい女性は、

「し、し、しい、しいちゃんっ?!」

編集長の奥様。

「早く離婚届書こうねえ」

その笑顔は、尚のS様加減をも上回る。

「イヤだああ〜!!」

強引に、社長室へ運ばれる編集長。

Sの確率

「志紀^{しき}さん、素敵^{すてき}だわあ……」

サエさんは、溜め息まじりで言いながら仕事を始めた。

「……尊敬^{そんけい}だよなあ……」

社長室の扉に、耳を当てて真剣に聞き入る尚。

「盗聴^{たうてい}は、犯罪^{はんざい}」

一斗缶^{いんとく}で忠告^{ちゆうこ}する関澤^{せきざわ}さん。

「尚^{なう}、仕事^{しごと}しろ」

しかも、2回。

「……つてえ……」

頭^{あたま}を押^おさえて、痛^{いた}さアピールする尚。

「角^{かど}が良^よかったのか？」

一番痛^{いた}そうな底^{そこ}の角^{かど}を、指^{ゆび}でなぞる関澤^{せきざわ}さん。

「えっ、え、遠慮^{えんりょ}しますす！」

俺^{おれ}の場所^{ばしょ}からは関澤^{せきざわ}さんの表情^{へいしやう}が、見え^みなかつたのが、残念^{ざんねん}。

編集長^{へんしゅうちやう}、S気質^{きしつ}社員^{しやくいん}のみ採用^{さいよう}？

セクハラ？パワハラ？

そんな中、どさくさ紛れに俺の下半身を触るのは、

「サエさんっ」

舌打ちして

「外海、」

な、何でっ

「仕事しなさいっ」

スクール水着？

しかも、女の子用。

「仕事し……」

ますが…

「外海だけ」

いつの間にか、ダンボールの山で…俺の居場所が埋め尽くされてる。

「皺しわ寄せないの、おかしいでしょ？」

「そうです、ねえ……」

呆然と立ち尽くす俺の真横で、

「手伝ってあげようかあ？」

投げキスするサエさんに、

「いいませんっ」

アタックして、返品。

誕生日

夜明けの珈琲を飲みながら、

尚：当たって砕ける（笑）

病院へ向かう道中、

俺：サエさんとよろしくう（笑）

尚に皮肉メールを返信して、いざ！

尚：意外とスタイルいいからムカつく（怒）

添付ファイルを開く。

サエさんと尚が、めちゃくちゃ激しく絡み合うエロい動画。

俺：バカップル（爆）

お前ら、付き合っちゃえば？

少し萎れたピンクの薔薇の花束を持ち、個室の前で立ち止まる。

『那珂 倫子 様』

何かムラムラしてきた。尚のヤツ、あんな動画…永久保存してやる。

スライド扉を開き、

「……………ん……………」

いきなり、喘ぎ声が聞こえて

『ゴクツ』

喉が鳴る。鳴る。

「……………たあ……………」

ベッドを軋ませて

「……………ダ、メ……………」

独りで気持ちよがる那珂の声で興奮しつつ、

「……………あ……………あ……………」

恐る恐る那珂が寝ている筈のベッドに近付く。

誕生日(2)

「あぁんっ!!」

イク時は一緒に。って言っただろ!

ガンッ

興奮し過ぎて、ベッド付近の椅子に足をぶつける。

「……誰?」

カーテンを開けて

「…外海…?」

ベッドに寝てる那珂に、ダイビング。

「倫子お」

俺、我慢出来ないっ!!

「は、激しいっ…:てばっ」

無我夢中で、那珂の体を触る。そして、柔らかい感触にほくそ笑む。

「総司ネココ、摘むなっ」

頭に衝撃が走る。

那珂の手には、部厚く重そうなベストセラー小説。はつきり言って、エロ要素はゼロに等しい推理小説。

「……痛い…」

それで殴られた衝撃と

「気のせいだ、総司」

名前を呼ばれた衝撃で、暫く立ち直れない。

誕生日(3)

「……りんちゃん……」

早急に、

「乳、触らせろっ」

気が収まらん!!

「嫌っ」

俺の下心をきっぱり拒否する那珂。

「絶対、嫌だっ!!」

組み手になり、右手に持ってた花束の花びらが宙を舞う。

「揉ませろ」

那珂に顔を近付けて

「……いいだろ……?」

耳元で囁く俺に、

ゴツッ

「……え……?」

頭突き?

「誰が揉ませるかっ」

俺、彼氏だろ?

「退けっ」

少しショックを受けてる間に、いつの間にか病院の冷たい床の上
だった。

「外海、来てくれてありがとう……」

涙目になるが、必死で堪える。

「ああ……」

倫子、誕生日おめでとう。

名前の由来

総司。

この名前で呼ばれるのは好きじゃない。

「權ちゃん、」

だって、あの有名な方のお名前を施設長が好きだからと俺に名付けた。

即答、だった。

「合格う〜」

安易過ぎる。

その名付け親は今、目の前で俺の原稿を満足気に見る編集長のお兄さん。

しかも、一卵性双生児かと思うほど似てる…って、

「総司、無視しちゃイヤッ」

何故、ココに？

「志布志さんっ」

離れてくださいっ！！

「武瑠、何か用？」

眉間にシワを寄せ、明らかに不機嫌な編集長。

名前の由来(2)

「大和が呼んだ筈だよお？」

編集長。目が泳ぎまくってます。

「……最低、だな……」

なあ？と、俺の頭の上で囁き、

「…っ…」

耳、噛むの反則。

「大和、いつから総司を狙ってたんだあ？」

さりげなくケツを触りまくる志布志さんの腕を掴む。

「男に興味ありませんから」

目を合わせたのが、間違いだった。

「可愛いなあっ」

迷いのない笑顔で奪われた…

「權は俺のモノなのぉ〜!!」

頬にチューだけで、机に置いてある玩具を手当たり次第投げる編

集長。

「発掘したのは、俺だっ」

投げつけられたモノを全て投げ返す志布志さん。

「まだ、まともにチューしたことないのにい」

「悔しい？」

編集長が顔を真っ赤にして怒る姿を楽しんでませんか？

名前の由来(3)

「それで、何か思い出せたのお？」
首を横に振り、

「ムラムラして、思い出せないよぉっ!..!」
編集長、落ち着きましよう。

「ムカムカ、じゃない？」
興奮具合が、一文字違いでかなり違う..!

「じゃあ、総司連れて帰るよぉ？」
相変わらず、話の展開が読めない志布志さんに両腕を掴まれた。

「ダメッ」

椅子に寝転がってた編集長が、いつの間にか目の前にいて、志布志さんの両手を強引に離す。

「武溜呼んだのは、」
『これ』と、志布志さんにしか見せないように書類を見せる。

俺、邪魔？

名前の由来(4)

權。

この名前は、元々の俺の名前。

源氏名で使ったのは、単に本名『総司』が嫌だから。他に思い付かなかった。

志布志さんと変わらない俺の名付けセンス。

「ただいま戻りました……」

取材から戻った尚が、

「ドッペルさんっ?!」

目を丸くして武瑠に近付き、ガッツリ見る。

「武瑠、だよあ?」

と、尚の唇に親指を押し当てる志布志さん。

「ご無沙汰あ」

次の瞬間には、志布志さんに抱かれる尚。

「はあ?」

離れるアピールは、志布志さんから見ればお誘いアピールで、

「お前に興味ないからっ」

「激しいなあ」

幸せそうな笑顔で、首筋を舐める志布志さん。

「やめろっ」

さりげなく、尚のカッターシャツのボタンを外して、

「好き、でしょ?」

名前の由来(5)

「志布志兄い？」

サエさんの笑顔は、即座に怒りへ変わる。

「オレのに手え出すなあっ」

ええっ?!

『いつから?』

編集長と志布志さん、シンクロしてサラウンド。

「違っって…」

完全否定する尚に、

「付き合ってるよんっ」

幸せオーラ全開で、尚に絡み付いて離れないサエさん。

「付き合ってないっ!!」

「付き合ってるってばっ」

言い争いながら、お互い腰に手を回して…

「実際、どうなの？」

志布志さんが、尚とサエさんの手を引き離す。

「お前ら…」

もしかして、修羅場？

絶対主義

「……は？……」

バツリーンッ

「『は？』じゃなくて、『承知しました！』でしょ？權ちゃんっ？！」

事務所では、まだまだ修羅場らしい。

「納得出来ません」

「美雪ちゃん直々に、依頼があつたんだよお？」

俺が居ないところで勝手に話が進んでて今更、断れない状況に追い込まれるのが嫌で、

「美雪に断ります」

本当は、スゴく嬉しかった。

「權ちゃん、」

ドンッ

「ボク打ち合わせがあるから」

ガ、ガッシャーーンッ

『んなモノ投げたら、仕事出来ないだろっ！！』

尚の地声が響き、物音が激しく聞こえる中、

「後はヨロシク」

事務所の修羅場から逃げるように出掛けた編集長。

『本体はヤメろっ！！』

そろそろ、止めに入ろうかなあ…

ドアを開けると、

『サエ以外のコなら投げないよお？』
ん？

「何？」

サエさんと尚、同時に見つめられる。

「俺、外海がイイツ」

「はぁあ?!」

最期のお仕事

「後悔はない？」

「コクリと頷き、

「外海、」

久しぶりに触る那珂の体は、

「ハグだけっ…」

ちよつとだけ頼りなく

「触るな」

俺、彼氏だよねえ？

「お触りしたいい〜」

ただ、乳触ろうとしてるだけ。

「駄目」

なのに、拒否された。

「嘘お…」

思わず、思いがけず声に出してしまった。

「…見てる…」

そこ。と指差したのは、

「ん？」

何もナイ…筈の机に、正々堂々と小型カメラが居座ってる。

「外海、」

そのカメラに近付き、

「本当に…ありがとう…」

破壊しながらの笑顔は涙が溢れてた。

「…倫子…」

眼鏡を外して顔を覆い隠す那珂を包み込むようにそつと抱き締め
る。

「こちらこそ…」

あり…が…とう…

『ゴメン…』

急所に、那珂の足が。

俺、白目向いて倒れてる…

【外海だけの特典映像（終）】

「
終わり？」
」

最期のお仕事(2)

「特典映像満載だねえ」

編集長に、

「俺の愛が詰まっていますからあ〜」

サエさんと、

「一番エロいところだけ」

新たなDVDを出す尚。

あの修羅場で無事だったのは、関澤さんの仕事場のみ。

「いい加減、」

バキッ。

「買いに行け」

真っ二つに割られたDVD。

「……返事は？」

関澤さん、攻撃的目線で編集長を見つめ続ける。

「は、はい……」

脅迫？

「家電屋行くよあ〜」

俺の腕に、手を絡ませて

「權ちゃんっ」

俺、行くなって言ってますんっ!!

サプライズ

しょーもないダイレクトメールの中に、

「ん？」

一通の手紙が。

総司。

お元気ですか？

多分、コレを読む頃にはもういないと思います。

顔を見るだけで…会っただけでよかったのに…

ごめんなさい。

元カノさんには、総司に代わって土下座して謝りました。

元カノさんには事情を説明したから、コレを読んだらスグに連絡して！元カノさん、イイ人だから泣かせたらわかってるよねえ？

少しの間でしたが、お世話になりました。

バイバイ。

倫子

総司、大好きだよ。

權さんへ

尚からのプレゼントは観たかなあ？

多分、尚の事だから權さんに自慢気に見せ付ける光景を思い浮かべます。

ごめんなさい。

尚に代わって謝ります。

ところで、急な引退で折角の特集をお蔵入りにした事を本当に申し訳なく…

ごめんなさい。

倫子に代わって謝ります。

權さんと仕事が出来て、楽しかったです。ありがとうございました。

美雪

權さん、大好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4153t/>

確かにある必然

2011年7月17日14時13分発行